

著書紹介

「神風（シンパラム）がわく韓国（くに）」（吉川良三著：白日社）

著者の吉川良三氏（JKIT 会長）が、1994 年からサムスン電子の常務として韓国に滞在した時の体験をもとに、韓国と日本の文化やビジネス慣習の違いをまとめた書であり、日韓間のビジネスに関わる人にとって、韓国の文化や日常を知る上で、参考になる指摘と考え、シリーズで要約をご紹介します。

<第4回>チャンスを迎えた韓国

21 世紀を迎え、これまで工業化社会が築いてきた、生活のスタイルをはじめ、社会・経済・政治システムなどあらゆる枠組みに大きな変革が起きている。この情報化社会においては、韓国人が脈々と受け継いできた民族文化、精神構造が世界に向けて大きく飛躍する要因になりうると考えている。

1. 個人主義が力を発揮する情報化時代

(1)情報革命にとまどう日本

日本人のもつ「集団の文化」「聞く文化」「叱る文化」「隠す文化」などの独特の文化は、20 世紀の工業化社会では、うまく適合し、それによって確立した社会経済システムによって、1980 年代終わり頃までは、世界中から羨ましがられるほどの経済大発展を成し遂げた。

しかし、21 世紀を迎えた今、その世界に誇った日本型の経済システムは、情報技術の急激な発展による情報革命の波が押し寄せると、もろくも音をたてて崩れはじめ、この日本文化から来る伝統的な気質を、21 世紀の情報化社会にどのように変化させ適応していくか、戸惑っている。

(2)「個」を殺し切れなかった韓国

韓国は、日本とは似て非なる正反対の文化を持っているにもかかわらず、国土の狭さ、天然資源の少なさ、国民の勤勉さという自国と類似した環境条件下にある日本が驚異的な経済発展を成功させた姿を見て、「われわれだってやればできる」という反発精神だけで、日本の社会経済システムをほとんどそのまま導入してしまった。

その結果、外見上の経済発展には成功したが、その代償として、政経癒着による賄賂社会、放漫な企業経営、硬直的な労使関係、肥大した教育産業などの社会経済システムが確立してしまい、韓国文化の本質的な面がほとんど殺されて、悪い面ばかり突出してしまった。

企業内での地位と名誉は、個人の能力とは必ずしも一致しておらず、一定期間勤務していれば、年功序列という有り難い制度によってほとんどの人が手に入れることができた。

しかし、この習性で日本人と異なるところが一つだけあり、韓国人が自分の個性を殺しきれなかったことである。少しでも自分の意見と異なるところがあると、どんな仕事でも積極的に協力しない。そのため、日本と同様な企業構造でありながら、日本と比べて生産性は著しく落ちていった。技術者は個性があり、驚くほど優れた意見を持っていても、今のピラミッド型の組織では、その優れたアイデアや意見が、上位の階層にいくに従って、ねじ曲げられ、改竄されて正しい情報が経営層まで届かない。

しかし、これからの情報化社会では、情報はどの階層の人でも自由に受信し、発信すること

ができるようになるので、一般社員でも経営層に対して独創的なアイデアや会社にとって有益な提案をすることができる。

そうなれば、自然に階層構造の組織は崩れ、一人ひとりの個性から生まれる個人の力が有効に活用され、会社を発展させる原動力になるはずである。情報化社会は、韓国人の持つ「個の文化」の良さが最大に発揮できる社会なのである。

(3)爆発の時を待っている傲気のマグマ

日本人は、縦社会の不平等を素直に受け入れる文化をもっていたので、同じ階層の中でさえ平等であれば、不平・不満なく安心して生活することができる「縦の平等意識」であった。しかし、韓国人の平等意識は横の平等意識であるため、心の中では、人間であれば誰でも地位や財産も含めた権威までも平等でなければならぬと考えていて、身近な人間が自分より少しでも地位が高かったり、金持ちであったりすると猛烈に嫉妬心をいだいてしまう。その嫉妬心、口惜しさは傲気という精神の器に貯め込まれていく。そして来るべき情報化社会は、その傲気のマグマを一気に爆発させる絶好の機会を与えてくれる。

(4)三つの新しい「種」

韓国では、今まで権威に権力と富が集中し、いわゆるベンチャー的企業が育つ環境ではなかったが、今はいくつかの「種」が植えられて、その土壌が整いつつある。

- ・金大中大統領の強烈なリーダーシップによる規制緩和
- ・今まで、財閥企業が独占していた優秀な人材が、IMF 危機を契機とした財閥の構造調整により、放出されたこと。

「名誉退職」という大義名分のもと、野に出た人材の多くは、情報の平等、機会の平等、権威の平等という新しい環境の中では、その眠っていた創才が目覚めて、大きな花を咲かせる可能性が大きい

- ・実質的には IMF 体制下にあった時と変わらない国家的な危機状況で、神風がわき起こる条件が整っている。

2. 韓国の甦る匠の技術

新羅の都があった慶州の世界遺産「仏国寺」を訪れて、これまで、持っていた韓国に対する印象「韓国人は真似をする技術はあっても、独創的な技術はなく、特に精密を要する技術なんて存在するはずがない」というものは間違いであったと教えられた。

改めて、見つめ直してみると、精密なものづくりの技を競い合う技能オリンピックでは、今や韓国は世界一である。

現在、日本の総督府の跡地に李朝時代の王宮が復元されつつあるが、その見事なできばえを一目みれば技能世界一も納得がいく。

(1) 創造性を取り戻す環境と場

これまで、韓国を訪れた日本人は、「走っている自動車を見ると、ほとんど日本車と錯覚するデザインばかりであること、家電製品も日本製品とデザインも色も同じであること」などから、独創性がないと誤解してきた。

これは、韓国人自身が努力を怠ってきたのであり、韓国人一人ひとりが、このような現実を直視し、潜在的に持っている創造性と、受け継いだ匠の技術を改めて自覚し、意識を変えていかねばならない。

これまでは、構築されてきた企業風土が、個人の創造性を殺してきたが、大企業から野に下った人材の多くは、頭の中に眠らせていた創造力と技術を武器にベンチャー企業を興し、この2年くらいの中に急成長を遂げた企業も数多く出現している。

環境と「場」さえ、整えば、韓国人は日本や欧米のマネをすることなく、独創的な技術や文化を世界に向けて発信してことができる。

以上